

ヨハネによる福音書は独特の記述でイエス・キリストの誕生とはどういうことなのかを記しています。この福音書は「初めに」と印象的な書き出しで始まりますが、これは聖書の最初の文書、創世記の書き出し「初めに、神は天地を創造された。」を意識し、重ね合わせて読むように記されたのだと思われます。「初めに」とは天地創造の初め、時間の初め、全てがここから始まる初め、という意味です。そしてそこに「言があった」と記されています。この言が何であるのかについては 14 節に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」とあることから、明らかにされます。キリスト者が 14 節を読めば、言とは神の子キリストのことであり、キリストが肉体をとってイエスとして生まれた、ということも分かります。この神であるキリストが、肉体をとり、イエスとして生まれた。それがクリスマスです。この福音書が記されたギリシア・ローマの世界には、世界を生み出して世界を導く合理的な秩序を言と言っていました。従って、キリストを言と記した著者は、ギリシア・ローマ社会に生きている人たちに何とかしてイエス・キリストを知らせたい、その思いからこのような表現をしたと思われます。また、創世記が記す天地創造神話が語る天地創造は、言葉によるものです。言葉はその人の考えや意思を表すものです。神さまの心をはっきりと示す方、神さまの愛が現れている方、それがキリストであると、著者は記しているのです。

従って、この「言」という語を「言である方」、キリストと置き換えて読めば非常にはっきりするのです。ここには、神さまとは別におり、父なる神さまと共におり、父なる神さまと同じ神であるキリストが語られているのです。3 節には、言である方、キリストが、神さまと共に天地創造を行ったと記されています。大切なことは、この万物の中に私たち自身も含まれていることです。私たちは言である方によって造られ、生かされている、そのことによってキリストが全ての人一人ひとりの命と深く関わっているのだと、著者は語っているのです。

14 節の「宿られた」という語は「天幕を張って住んだ」という意味です。私たちがどこに行こうとも、キリストは天幕ごと移動して、私たちと共にいるのです。キリストの降誕において、私たちの中に宿り、私たちと共に歩むイエス・キリスト。この方は、今もパウロが語ったように、十字架につけられ給ひしままなるものとして私たちと共におり、私たちの歩みを守り、支え、導いているのです。クリスマスは昔の出来事を思い出して喜んでいるのではないのです。この出来事によって与えられた恵みの中に、私たちは今も生きているのです。